

IDACAだより

第9号 平成25年4月15日

● 編集発行
(財)アジア農協振興機関
東京都町田市相原町 4771
TEL: 042-782-4331
FAX: 042-782-4384

～IDACA サポートチーム「I & You 倶楽部」発足～

アジア農業協同組合振興機関 (IDACA) は今年で創立 50 周年を迎えます。一般的に企業寿命は 30 年程度と言われますが、社会の変化が激しくなる中一つの事業が利益を生み続けるスパンは短くなる傾向は強まると考えられます。IDACA は開発途上国の農協組織育成の研修を行っておりますが、その例外ではありません。

これまで長きにわたって研修事業を継続できたのは先輩諸氏が長年培った経験と知識を生かしながら、世の中の変化に柔軟に対応できてきたためです。開発途上国の農村は日本の 1950 年代後半から 60 年代の農村と同様な状況であり、一方、大都市は現在の日本とほぼ同じ水準です。経済発展の段階の 50 年間で都市と農村で同時進行しているので、日本の農協の事業経験が次に何が起きるかを予測し、対策を作るうえで大いに役立ちます。

IDACA は今後新たな事業展開に対応できる体制として、IDACA/I&YOU 倶楽部を設立しました。



平成 25 年 1 月 25 日 (金) に同倶楽部設立総会を開催し、同倶楽部初代会長としてかつて全中、新聞連でご活躍された山内偉生氏に就任いただきました。これまで系統各組織出身の先輩諸氏から講師・コーディネーターとしてご協力をいただいておりますが、それに加え開発事業における専門技術員派遣、行政等の公募事業申請における人材バンク等として同倶楽部会員を活用していきます。年に 3 回定例会として会員にお集まりいただき、先輩諸氏の経験・知識を IDACA 職員全員が共有し、その経験則やノウハウを継承していく仕組みを作っていきます。会員は山内氏を筆頭に 7 名の創始会員 (ファウンダー) とします。今後の活動のあり方については、更に検討を深めて頂きます。

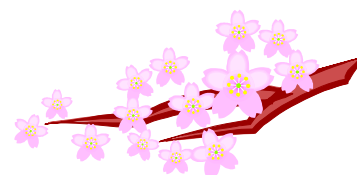


発足メンバーの名前: (左端から) 真田忠雄氏、気賀沢忠文氏、山内偉生氏 (初代会長)、原田康氏、大金義昭氏、春日清秀氏 (竹内憲二氏はご都合により欠席)

《目次》

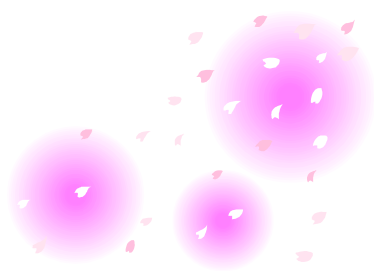
- IDACA サポートチーム「I & You 倶楽部」発足 1
- 研修事業報告 3
 - (1) ICA 中核リーダー育成支援研修
 - (2) JICA「アフリカ・アグリビジネスの実施と振興」研修
 - (3) JICA マレーシア協同組合マーケティング能力強化研修
- 平成 24 年度フォローアップ指導・調査事業報告 (ベトナム・ラオス) 6
- Happy Retirement! 照沼教務・開発部長..... 6

I & You 倶楽部創始会員の皆さんのプロフィール



(敬称略)

No.	氏名	経歴	その他(趣味等)
1.	山内 偉生	JA 全中農政部長・総務部長を歴任。その後新聞連常務理事、常任監事、JICAF 常務理事を務める。パラグアイに農協強化専門家として派遣。	ギター演奏
2.	原田 康	全農常務理事、農流研理事長を歴任。カンボジア、モンゴル、ベトナム等アジア及びアフリカ諸国で実施されている様々なプロジェクトにマーケティング専門家として参画。現協同組合懇話会会長。	健康法、縄飛び(毎日朝晩各 5,000 回)
3.	竹内 憲二	全農 OB。全農在職中、オーストラリア、アメリカに駐在。全農在職中は主に飼料事業全般に携わる。全中 WTO 室嘱託として勤務。ASEAN キャパシティー・ビルディング・プロジェクトに携わる。農協のマーケティングについて ASEAN 各国で講義。	「アジアには未来がある」が自分の生き甲斐。そのためなら何でもします。
4.	春日 清秀	組合貿易在職中、タイ、オーストラリアに長期駐在。主に飼料関連の貿易に携わる。タイ農協育成プロジェクト、ベトナム酪農育成プロジェクト、中国コールドチェーン流通プロジェクトに参画。	カメラ、旅行、カラオケ
5.	真田 忠雄	農林中央金庫。JA 全中出向中の 1992 年、ICA 大会事務局(“基本的価値”の担当)。その後 JICA から農業金融専門家としてベトナム農業省へ派遣される。IDACA の依頼を受け、金融専門家としてルーマニアに短期派遣。その後も IDACA 研修の現地研修受入れ等に協力。	ボート(慶応大ボート部監督も務めた経験有)。 地元の田んぼ 5 反で彩の輝きの米作り。
6.	大金 義昭	家の光協会編集局長を経て、講演・執筆活動に専念。日・タイ経済連携協定の一環で JA 全中が実施したタイ人材開発支援プロジェクトに専門家として参画。その後もタイとの関わりを深めている。	謡曲・読書、毎日の散策
7.	気賀沢 忠文	JA 神奈川中央会教育部長を経て、JICA シニア・海外ボランティアとしてネパールの農協育成に携わる。またネパールの NGO 活動にも参加し、昨年からは 5 ヵ年計画で JICA プロジェクトを実施。生産出荷組合づくりの専門家として計画づくりから参画しており、今年、来年と現地での指導を予定している。	ジャズ・クラシックなど音楽全般を聴くこと



 <研修事業報告>
(1) ICA 中核リーダー育成支援研修

当機関では、国際協同組合同盟アジア・太平洋地域事務局(ICA-AP)の協力の下「平成 24 年度第 1 回 ICA 農協中核リーダー育成支援研修」を 10 月 9 日から 11 月 3 日までの日程で実施しました。ブータン、カンボジア、ラオスなどから計 11 名の研修員が参加し、日本での 26 日間の研修に励みました。

現地研修は青森県内で行われ、JA 青森中央会、JA アオレン、JA ゆうき青森、JA 津軽みらいの運営する道の駅「サンフェスタいしかわ」などを訪れ日本の総合農協の運営手法や農産加工の事例を視察や講義を通じて学びました。また、観光物産館アスパムや弘前市リンゴ公園を見学し、地域特産物を生かした販売戦略についても理解を

深めました。

研修員は、研修中に得た新しい知見をもとに自国でも実行可能なアクションプラン（行動計画）を本研修の最後に作成しました。



JA アオレン（青森県農村工業連合会）にて

(2) JICA「アフリカ・アグリビジネスの実施と振興」コース

国際協力機構(JICA)の委託を受け昨年からの地域別研修「アフリカ地域アグリビジネスの実施と振興コース」を実施しています。第 2 回目となる本年は 10 月 28 日から 12 月 8 日までの日程で実施されました。



大分大山町農協の直売所及びレストラン
「木の花ガルテン」にて

今年はアグリビジネス振興を目指すサブサハラ* 諸国や北アフリカから 16 カ国 19 名の産業・農業振興担当の行政官らが参加しました。

現地研修ではまず長野県を訪問し、長野地方卸売市場、長野県農協地域開発機構、長野県農村工業研究所、長野興農(株)、JA ながのとその関連施設、信州大学、北村農園を訪れ農産加工を中心に理解を深めました。

続いて大分一村一品国際交流推進協会の協力の下「一村一品運動」の発祥地・大分県を訪れ、安心院町での農家民泊体験や大分大山町農協の直売所、農事組合法人「畦道グループ食品加工組合」などの視察、同協会による講義やワークショップを通じてグリーンツーリズムや農産物の高付加価値化について学習しました。

研修員らは本研修で得た知見を基に企画書を作り、帰国後その実現を目指します。

*サブサハラとは：アフリカのサハラ砂漠よりも南に位置する地域の総称。サブサハラの国々は 48 か国。面積は全世界の約 18% を占め約 8 億の人々が暮らしている。北アフリカはイスラム教国が多いが、サブサハラの多くはキリスト教が信仰されている。



親子2代でIDACAの研修に参加！

ケニアのJICA事務所から「アフリカ地域アグリビジネスの実施と振

興」研修に参加の合格通知が届いたときは色々な意味でとても興奮しました。と言うのも、これが私の2度目の日本訪問であり、研修先がIDACAであったこと、そしてIDACAは行政官をしていた私の父が2度も研修で滞在した思い出の場所だったからです。私たちは親子2代にわたりIDACAの研修に参加し、同じくIDACAが第2の故郷となりました。

私は2005年9月に兵庫県で実施されたJICA研修「害虫管理と植物保護」に参加し、すっかり日本に魅了されました。人々、環境、インフラ、技術、そして食べ物！特に魚介類と寿司は最高でした。

今回私が参加した、「アフリカ地域アグリビジネスの実施と振興」研修はアフリカの16カ国から農業分野で働く19名の研修員が参加しました。ナミビア、ザンビア、タンザニア、ウガンダ、エチオピア、カメルーン、ガーナ、ブルキナファソ、セネガル、ナイジェリア、コートジボアール、モザンビーク、トーゴ、ベニン、スーダン、それぞれの国の農業関係者と交流できたことは本当に貴重な経験であり、彼らと情報を共有することでアフリカ全体に視野が広がり、私のアグリビジネスに関する知識を豊かなものにしてくれました。私がこの6週間の研修で得た知識や経験は必ず我が国の農村社会に還元され農民の所得向上につながると思います。



閉講式で修了証書を受け取るエミリーさん

オセナ・エミリー・ドロシー（ケニア）
農業省アグリビジネス市場開発管理
アグリビジネス促進部主席農業担当官



世田谷にあった頃のIDACA講義室（1985年当時）

私の父、ジョシア・オセナ・オヤンドはIDACAがまだ世田谷にあった1985年に初めて日本の研修に参加し、IDACAが高尾に移転した後の1994年に2度目の参加を果たしました。もう行政官の仕事からは退いていますが、父は今でもその当時の日本での経験を懐かしく思い出しています。私がIDACAにいるときに父に電話を入れ、「お父さんの第2の故郷、IDACAにいるのよ」と伝えると、笑いながら「照沼さんや安部さんは元気か？彼らも年を取っただろうね？私がいたときは若者だったよ。」と興奮した様子で話していました。彼にとってIDACAは今でも第2の故郷なのです。



父、ジョシア・オセナ・オヤンド（左端）

あまり年を取らないうちにもう一度日本に行きたいと思いますが、もしそれが叶わなくても私の子供たち、少なくともそのうちの一人は日本の研修に参加して欲しいと思っています。特にIDACAの研修に。それはオセナ家3世代でIDACAの研修参加となることでしょう。

(3)平成 24 年度 JICA マレーシア 協同組合 マーケティング 能力 強化 研修

本研修は、平成18年に日本国政府がマレーシアと締結した経済協力協定（EPA）の枠組みの中で JICA からの受託研修という形で実施されることになったもので、今回で3回目となります。

マレーシア国政府組織である「マレーシア協同組合委員会」から4名、「マレーシア協同組合大学」から6名の計10名が参加し、平成24年12月2日から12月21日にかけて当機関と愛媛県にて研修を実施した。

研修前半は「日本の農協組織と事業、特に販売事業を中心とした事業の仕組み」、「農産物流通と販売戦略」、「農産物の品質安全確保と GAP の取り組み」等について学び、後半の愛媛県での現地研修では、JA にしうわと JA おちいまばりを訪問し、「みかんの共同集荷・販売」、「直売所事業」というテーマで販売事業の取り組みを考察し、加えて農産加工事業としての JA 全農えひめのジュース工場、農産物の主たる販路となる卸売市場を見学しました。

また、最後の週には農協と生協との連携を視点に、日本生活協同組合連合会を訪問し販売事業の取り組みについて情報を得る機会を得ました。

多くの研修員からは「農産物流通を支えるインフラ、日本の農協の強固な販売システム、そしてその農協がいかんにして組合員の所得向上のために取り組んでいるかについて多くのことを学んだ」とのコメントが出されました。そして、「みかんの収穫体験」も良い思い出となりました。



JA にしうわにてみかんの収穫体験



マレーシア研修を受け入れて

愛媛県農業協同組合中央会
総務企画部 伊藤 俊二

アジア農協振興機関からの依頼により、平成 23 年度に続き、今年度も現地研修を受け入れさせていただく機会に恵まれました。全国 47 都道府県ある中で、愛媛県が 2 年連続してお世話させていただくことができましたことに誇りを感じます。

研修員の皆様の態度は大変すばらしく、さすが母国の代表として熱意と目的を持って来日された方々であることをあらゆる場面で感じました。

愛媛県と JA グループ愛媛について、お伝えしたいことが沢山ありましたが、同時通訳が必要となるため、限られた時間となってしまう、「少し内容を詰め込みすぎたかな」という反省があります。研修員が帰国され、母国で愛媛県について説明する機会がある時、すばらしい場所であったと言っただけのよう、また、世界に誇れる JA グループ愛媛となるよう、今後とも努力したいと思います。



平成24年度フォローアップ指導・調査事業報告 その1-ベトナム

平成24年度のフォローアップ指導・調査事業を平成25年1月28日から2月6日までの日程で、ベトナムとラオスにおいて実施しました。過去3年間にICA研修に参加した元研修員を対象とし、アクション・プランの進捗状況の聴き取り調査を中心に、現地の農業・協同組合の現状等の調査を行いました。



VCAに集合した元研修員と

ベトナムではICAの会員組織であり、最も多くの研修員をICA研修に送り出しているベトナム協同組合同盟(VCA)を受け入れ窓口とし、元研修員との連絡、訪問先の調整等をお願いしました。元研修員の聴き取り調査はVCAの会議室で実施し、対象者19名のうち16名の参加がありました。資金不足や異動などでアクション・プランの実施が難しくなっているという意見が多く出される中で、300ある農協の中から25のモデル農協を選定し事業内容を調査、問題点を



HCAEの事務所にて元研修員と

分析し農協の組織強化に取り組む元研修員の報告や日本の研修で得た知識や日本の農協の実情などをホームページに掲載し広く組合員に情報提供している報告などもありました。その後、ハイフォン市へ移動し、VCAの県レベル組織であるハイフォン協同組合同盟(HCAE)を訪問し、会員組織であるミン・ダック農協を視察しました。



ハイフォン市内にあるミン・ダック農協訪問

※ラオスの報告は次号に掲載予定です。

Happy Retirement! 照沼教務・開発部長



平岡常務より辞命を受ける照沼氏(左)

1979年よりIDACAの職員として勤務され、近年は教務・開発部長としてIDACAの研修事業や海外専門家派遣、プロジェクト案件開発の陣頭指揮を取ってきた照沼弘氏が2013年3月をもって現職を退かれました。引き続きIDACAに在籍し、今後は海外協同組合開発コンサルタントとして活動されます。さらにその経験と実績に磨きをかけ、海外の農協・農民組織の発展のために貢献していただきたいと思っております。

